
緋弾のアリア ~ 負完全な転生者 ~

クロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜負完全な転生者〜

【Nコード】

N2526Z

【作者名】

クロス

【あらすじ】

もといた世界を大嘘憑きの誤作動で虚構してしまった球磨川禊はなぜか大嘘憑きの能力が変に使われて緋弾のアリアの世界に転生することになった。そこで球磨川は武偵神崎・H・アリアたちに出会い共に戦ったりしたりする

序章 〽転生〽（前書き）

書きたかったから書いてみました。

序章 〱 転生 〱

序章 〱 転生 〱

「おい、主起きんか！起きろといったら起きんか！！」

『お母さん後五分…』

「ワシャお母さんじゃないわ」眼を開けてみると目の前にサンタさんみたいな容姿のおっさんがいた

『じゃあどちら様？』

「わしや神様じゃ」どうせ神様出てくるんだったら可愛い女神だったらよかったのに

「失礼なこと考えるなあ」どうやら自称神様（笑）は心を読めるようだ

「自称じゃないれっきとした神様じゃ」

『じゃあ神様僕が死んだんだったら、オールフィクション大嘘憑きで生き返るはずなんだけど』

「残念ながらその大嘘憑きの誤作動のオールフィクションようで主のいた世界が虚構さ
れたんじゃないよ。」

『じゃあなんで僕がここにいるの?』

「大嘘憑きの能力が変に使われて転生するようじゃよ」
オールフイクション

『じゃあ、めだかちゃん達は死んじゃったの?』

「……………」自称神様（笑）が黙ったということは死んだのだろう

『どこに転生するの?いちご100%?それともT o L o v e する?』

「いや、緋弾のアリアじゃ」

『緋弾のアリアってあのラノベの?』

「そうじゃ、それで危ないから武器をやるうどんなのがいい?」よかったあたりだ

『じゃあ威力の高い銃二丁で』

「威力が高かったらそのぶん反動が重いぞ」

『大丈夫、反動を虚構なかつたことするから』

「じゃあ、パイファー・ツェリスカ二丁でいいか」そのパイファーなんとかを渡してきた

『うん、ありがとう。あ、あと学校は東京武偵高で学年とクラスは、キンジ君達と同じ2年A組でよろしく』

「わかった。そうしておこう。あ、あと履歴は適当にたてておいた

から、一応書類を渡しておこう」書類を渡してきた

一般高からの転校生だって、しかも学力が低すぎる失礼だなあ

『後ネジもちょうだい』

「ほい、あと、緋弾のエリアに関しての記憶を消しておくからの」
ネジを渡してそういった

『まあ仕方ないよね、ネジありがとう。この学ランのままでいられるようにしてよ』

「しょうがないその学ランを防弾にしないと、あとは主だけ特別と
いうことにしておこうかのう。家については書類にかいておいたか
らのう」

「そろそろ時間じゃ。くれぐれも世界を虚構せんでくれよ」

『楽しみだなあ』そう言ったところで真っ暗になり意識がぶっ飛んだ

「……………さらばじゃ 球磨川楔」

第一弾 〓学校までの出来事〓（前書き）

球磨川さんは一応性格を戦拳後能力が戦拳前ということにしておいて
くださいm(――)m

第一弾　　＼学校までの出来事＼

第一弾　　＼学校までの出来事＼

『転生できたのかな？』回りを見渡すと道路の真ん中にいた

『ここどこ？とりあえず書類を読んでみよう』手に持っていた書類を見ると

主の行くことになる学校は辺りに見える学校じゃとか書いている

『……………辺りにって…ここ体育倉庫の中なんだけど…………』とりあえず外に出てみると

『あれ？こっちに何か飛んできてる？』紙飛行機みたいなのが飛んできたしばらく見てみると

『うわ！パラグライダーだし人が乗ってる！』とりあえず体育倉庫に戻るとそれもついてきてしまった

『ど、どうしよういきなりピンチだ』とりあえず横に移動すると

ドシャーン、と音をたてパラグライダーが墜落した

『…まあいいや、僕には関係ないし。そんなことよりも学校にいかなきゃ。』

体育倉庫から出てさっき見えた学校みたいな建物の方に歩いていった

『あれが学校じゃなかったらどうしよう。記憶を消されたせいで位置がわからないじゃないか』

自称神様（笑）についての愚痴を言いながら歩いていると、何か変な乗り物が10台きた

『この世界って変な乗り物があるんだなあ。』そういうといきなり変なのについていた銃が発砲した

『え！？』

銃弾にいきなり頭を貫かれて死んだ。するとすぐに大嘘憑きが発動して死んだという事実を虚構なかつたことされて生き返った。

『すごく痛い。とりあえず体育倉庫に逃げよう』

走って体育倉庫に戻ると、途中にまた撃たれて死んで生き返った。

『そついや僕も銃を持っているんだった』

そう言って学ランのポケットの中からパイファーなんとか（以後パイファー）を取り出した。

『反動が大きいんだったつけ？大嘘憑きで反動を虚構なかつたことしなきゃ』

パイファーを構えて撃った。ドガーン、すると一台の変な乗り物がスクラップになった。

『自称神様（笑）のいった通り凄い威力だ………こんなの二丁撃った

「最強じゃね?」

この後何回も逃げて死んで生き返って逃げながら撃って壊してを続けて残り三台になった。

体育倉庫の敷地への曲がり角のある前を見ると変な乗り物が五台こちらに向かって来ていた

『とりあえず数を減らさなくちゃ』そう言っパイファーをもう一丁を取り出して両方で撃った

遠くて慣れてなかったから一発外したがもう片方が当たりスクラップにした。そして体育倉庫の中に向かって走った

(いったい何回死んだんだろう)

考えながら体育倉庫の中に入った。すると……跳び箱の中に銃を変な乗り物に向かって構えている女の子がいた

「さっきからの銃声はあんたね? あんたも手伝いなさい!」ピンクのツインテールが言ってきた

『えー、せっかく逃げてきたのに?』嫌そうにいった

「その学ランあんた一般生?」

『今日から僕も武偵だよ』

「じゃあなんで防弾制服着てないのよ!」

『大丈夫、この学ラン防弾だから』

「なら戦えるわね。ちょっとあんたも戦いなさいよ！」一緒に跳び箱の中に入っていた男の人に言っていた

『君たち武偵なの？もしそうだとしたらもう始業式始まつてると思うんだけど？』二人に言ってみたら

「「武偵殺しに巻き込まれたんだ（のよ）！」」「二人ともハモって言った

『早くあれやってよ。さっきからついてくるんだ』

「だからあんたも手伝いなさい！」銃で撃ちながら言ってきた

『この距離じゃあ弾の無駄になっちゃうよ』

するとさっきまで跳び箱の中に入っていた男の人が女の子をお姫様だっこをして出ていきなり変な乗り物に向かって銃を撃った。

すると7台の変な乗り物が壊れた。

（そんなことするんだっいたらはじめからやってくれたらいいのに）そう考えているとまた銃弾が頭を貫いて、また死んで生き返ったそれを見ていた女の子が驚いていた。

「あ、あんた今頭銃弾が貫いて……血が……なんで生きてんのよ」震える声で言ってきた

『えーと、壊してもらったし行こつと』走って逃げた

「ちょっと教えなさいよ！」その声を聞いたあともう聞こえなくな
った。

第二弾 〽転校〽（前書き）

一応緋弾のアリアについての記憶を消されたので、2年A組にして
と言ったのは覚えていません

第二弾　く転校く

第二弾　く転校く

あのあと遅刻して始業式に出た。一人だけ服が違っから変な目で見られた。

始業式のあとに教務科といわれる場所に行った。そこで跳び箱の中に入っていた女の子がいた。

「あ、アンタさっきのマジシャンなんでこんなところに」

『マジシャン？まあ今日から僕も武偵？になるからねえ、ここにいるのは当然だよ』

「あら、神崎さんと知り合いだったの？よかったわ球磨川君が一人ボツチにならなくて」

『いや、今朝にあっただけです。』

「私の前であんなことしておいてよく会っただけって言えるわね」
誤解を招く言い方をするなんてひどい

「あんなことしておいて？なにをしたんですか？」先生も食いついてこなくていいのに

『いや、なにもしてませんよ』

「いっぱい出してた（血を）」いかげんに誤解を招く言い方をやめてくれないかな

「球磨川君ちよつと話さなくてはいけないようですね」

『先生誤解ですよ。出したのは血ですよ変なものは一度も出してません』

「そうですか。まあいいでしょう。さあ行きましょうか」

そういうやり取りをして先生と共に割り振られたクラスの2年A組の前に来た。

「入ってきてと言うまでそこで待っててね。」先生が言ってきた

「アンタどうやってあんなマジックしたの？頭貫かれたように錯覚させてしかも上手に血も出すなんて」

『えーと、たねは教えられないよ』適当に返事をしといた

「アンタ一般高からの転校生でしょ銃は何を使ってるのよ？」

『確かパイファー・ツェリスカ？って名前だったと思うよ。それを二丁』

「パイファー・ツェリスカって一番威力の高い拳銃じゃないのよ。威力の高い銃はそのぶん反動が大きいだよ。それを二丁ってあんたの細腕じゃあ無理よ」

『でも実際にそれで変なのを何台か壊したよ』正直に答えてみた

「嘘よそれだつたら逃げてこないもの」もういいやめんどくさいし
「はい二人とも入ってきて」入ってきてといわれたので僕たちは会話を止めて入った。

先にアリアちゃんが自己紹介とベルトの返却をしてその後の騒ぎがおさまってから自己紹介をした

『はじめまして。星雲高校から転校してきた球磨川楔です。まだ学科は決めてませんこれからよろしく』

みんなが括弧？なんで学ラン？とか言っていた。

「球磨川君は神崎さんのようにリクエストとかない？」

『特にありません』

「じゃあ峰さんの隣の空いてる席に座って」先生が指を指した席に座った

『よろしく。りこりん？』さっき自分でいったからたぶんあつて
るだろう

「えーと、楔だから…、みそぎんだ！よろしくみそぎん」変なあだ名がついてしまった。

休憩間時間に質問攻めにあつた。

「なんで学ランなの？」『一応防弾だし、学ランがよかったから』

「なんで括弧？」『括弧つけたいから』

「学科は何にするの？」『まだ決めてないって』

「部活はするの？」『するきなんてないよ。』

このような質問攻めに会った後すぐに学校が終わって神様に渡された書類に書かれている家についた。一応もう一人住人がいるようだからチャイムを押した。

ピンポーン……あれ？出ないからもう一度押してみた。ピンポーン　ガチャっ

「誰だよ」中から今朝に跳び箱の中に入っていた男。確かキンジ君が出てきた。

『えーと、君が同居人だね。これからよろしくキンジ君』

「ああ、転校生の……確か球磨川だったわけ同居人が来るって言うたけどお前のことだったのか。まあ入れよ」

部屋に入った。

第二弾 〽転校〽（後書き）

うーん、球磨川さんのキャラ崩壊の予感が！？

第三弾 くアリア来襲く（前書き）

うーん、塾にいくまでに急いで書いたせいか変になってる気が……
もし変になってたら感想のところで指摘してください。編集で変えます

第三弾　くアリア来襲く

第三弾　くアリア来襲く

「そういえばお前宛に荷物が届いたぜ」

『僕宛に荷物？』この世界に来て1日もたっていないのに誰からだろう？開けてみた

『銃弾と通帳と印鑑だ…あ、中に手紙が入ってる。』

（その銃弾は武偵弾というものの炸裂弾、閃光弾、^{グレネード}閃光弾、^{フラッシュ}閃光弾、^{フレア}燃燒弾じゃ、一つだけでもかなり高いから大事にするんじゃぞ。後その通帳には2000万入ってるからそれも大事に使うんじゃぞ。by神様）

『…………2000万って遊んで暮らせる額じゃないか。』

「2000万だと！そんな金どこでてに入れたんだよ」キンジ君が聞こえたらしく言ってきた

『さあ？どうやったんだろうねえ？そんなことよりねえこの銃弾ってどんな威力あるの？』キンジ君に銃弾の詰め合わせを見せた

「なっそれ武偵弾じゃねえかよ。一般高からの転校生なのになんでそんな物騒なもんもってんだよ」

『キンジ君どれが炸裂弾で閃光弾で燃燒弾なのか教えてよ』キンジ君がため息をついてこっちに来た

「キンジでいい。えーと、これが炸裂弾、閃光弾、燃燒弾だ。」

『キンジは物知りだねえ』

「俺も強襲科アサルトの時にサンプルを見ただけだ。このくらい武偵ならみんな知ってる」

『へー僕も覚ええないとね』そのあと僕は神様に渡された書類に書かれている銃の整備というのをやった

「お前それパイファー・ツェリスカじゃねえかなんでそんなもん使ってたんだよ。」

キンジが驚いた目で見てきた。この銃ってそんなに有名なのかな

『えーと、威力が高いから使ってるんだよ』キンジがやっぱりかと呟いていた

「球磨川お前、その銃撃ってみたか？それすごい反動あるんだぞ」

『今朝に変な乗り物に向かって撃ったよ』キンジがまたしても驚いていた

「そういえば今朝に体育倉庫に逃げてきてたな銃を撃ちながら」

ピンポン、キンジがいつてる途中にチャイムが鳴った

「その時に肩壊さなかったのか？」キンジがチャイムを無視していった。

『うん大丈夫だったよ（反動を虚構なかつたことしたから）』

ピポピンポーン、またチャイムが鳴った。

「人は見た目によらないってお前のようなヤツに言うんだろうな」

ピポピポピポピポピポピポピンポーン、また鳴った。さすがにキンジも限界らしく玄関に行った。キンジがドアを開けるとピンのツインテールをしたアリアちゃんが出た

「遅い！次はチャイムならして十秒以内に出ること！」キンジが怒られていた。

「トランク運んどきなさい」

「ねえトイレどこ？」キンジが発言するよりも早く見つけて入った。

そしてキンジがこちらを手伝ってくれといってるような視線で見えてきたから

『まだ整備の途中だし、僕には言われてないから手伝わないよ』と言った。

そしてキンジがトランクを中に入れ、僕は整備が終えて

『ねえアリアちゃん何しに来たと思う？』と聞いてみた

「全くわからん」キンジがそう言ってからアリアちゃんが出てきてこちらに来て

「アンタもいたの？なら探す手間が省けたわ。キンジ、楔アンタたちドレイになりなさい」

そうアリアちゃんが言った。

第三弾 くアリア来襲く（後書き）

それでは塾にいつてきます

第四弾 くジャンプは週刊が一番く（前書き）

まさかの今日二話目！正直作者は週刊もスクエアも読みます

第四弾　くジャンプは週刊が一番く

第四弾　くジャンプは週刊が一番く

『アリアちゃん、キチガイって君のためにある言葉だと思うんだく』

「なんでそうなるのよ！」うわっもしかして怒ってるのかな？

『だっていきなり来て、ドレイになりなさい！ってかなり頭がいつてると思うんだく』

「球磨川の言う通りだ。なんだよドレイって」キンジが聞いた。

「強襲科アサルトであたしのパーティーに入ることよ！別に頭がいつてなんかないわ！楔、アンタはまだ学科決めてないんでしょうから文句はないでしょー！」

『いや、まだ決めてないけど強襲科に入ろうとも思っていないよ』

「俺は強襲科アサルトが嫌になったから探偵科インクスタに転科したんだぞ、あんな狂ったとこ何て誰が好き好んでいくものか！強襲科になんてならないから帰れ」

「そのうちね」アリアちゃんが答えた。わかったこの娘B型だ

「そのうちねっていつだよ」「アンタたちが強襲科に入ると言っまで」キンジの疑問にアリアちゃんが答えた

「もし嫌だと言っならー」

「嫌だと言ったらどうすんだよ。言ってみろ」

「言わないなら、泊まってくから」アリアちゃんが確かにそう答えた

『ごめんアリアちゃんさつきキチガイって言ったけど訂正するよ。
君はキチガイはキチガイでもマジキチだったよ。』

「なによマジキチって？泊まってくって言ったたら泊まってく！長期
戦も想定済みなんだから」

玄関にあるトランクを指差していった。なるほど、あれに着替えと
かはいつてるのかキンジも気づいてから放置してくれたらよかった
のに

「出てけ！」その言葉をまさかのアリアちゃんが言った。

「なんで俺たちが出ていけなくちゃならない！ここはお前の部屋か
！」

「分からず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく
戻ってくるな！」

アリアちゃんは犬歯をむいた。そこで僕は

『キンジ、諦めよう。この娘マジキチの自己中だからしょうがない。
下にあったコンビニで一緒にジャ。プを読んでおこう。まだ今週読
んでないんだよ。』そう言うってから一緒に部屋から出ていった。

『いやー、初めてマジキチってのを見たよ。あれは一緒にいるとさ

すがにうざいね。』

僕がONE。IECEを読みながら言った。

「俺はマジキチって使ったのはじめて見たよ」キンジはジャンプス。エアを読んだ。

『なんでスク。ア読んだよ。ジャ。プを読めよ。やっぱりあれなの、T o L o v e るダー。ネスがいいの』

「ちげーよ。ギャグ。ンガ日和と青。クがいいんだよT o L o v e るダーク。ス何て読んでねえよ」

『うるさい。クエア派。スクエ。何てジャン。のおまけだ』

「別にスクエ。派じゃねえよ。週刊も読むよ」

『なんだよ。両方って邪道だよ。ってことはどうせマガ。ン、サ。デー、チャ。ピオンとか読んでるんだろ。』

「もうわかったよ。そろそろ戻ろっぜ」話を切り上げるように言ってきた。

『N A R。T O 読んだら行くから先行ってていいよ』途中でやめるなんて嫌だったから言った

「わかった先に行つとくよ」

『気をつけてね』そう言ってからキンジがコンビニから出ていった。

そのあとN。RUTOを読み終わってBLE。CH を読み始めた。

『最近BL。ACH調子悪いなあ』そう呟いた

第四弾 〱ジャンプは週刊が一番〱（後書き）

アリアがお腹減ったというのは飛ばしました。

理由は球磨川さんが何を食べるかわからないからです。別にキンジに買ってきてもらってのもよかったけど何買えばいいかわからなかったのでやめました。

アリアちゃんというのは球磨川さんがアリアと言ったら変だからです。

変な点があれば教えて下さい

第五弾　く悪夢く

第五弾　く悪夢く

結局僕はジャ。プを最後まで読んでから部屋に戻った。途中できれいな女の子とすれちがった。

（ここって男子寮だったんじゃないっけ？）そう考えながら部屋に向かって歩いた。

『キンジどうしたの？』キンジが倒れてたから声をかけてみた。

「こいつが変なことした罰よ！」風呂から上がったからか顔の赤い、パジャマ姿のアリアちゃんが言った

『だから気をつけてねって言ったのに。あ、キンジ先にシャワー浴びとくよ』そう言って風呂場に行った。

シャワーを浴びてから、キンジも風呂に入った。

『アリアちゃんは何で僕なんかパーティーに入れって言ったの？』興味があつたから聞いてみた。

「アリアちゃんってやめなさい。あんたのあのマジック銃弾が見えてるからできてると思ったからよ」

『僕は一般高からの転校生だよ。見えてるわけじゃないじゃん。』

「じゃあどうやったのよ。銃弾が当たって血が出たのに傷なんかないし、転校生だから超能力者って訳でもないし。アンタ何者よ」

『ただの転校生だよ。』キンジが上がってきた。

『もう眠いし寝るよ。キンジ僕ソファで寝るから。おやすみ〜』
そう言っソファで寝転がった

「ああ、おやすみ」キンジが返事してきた。

「ちょっと、話そらさないで！」アリアちゃんが言った

『また明日にでも調べたらいいじゃないか僕が何なのか。どうやったのかも』そう言っから寝た。

夢の中

「おい球磨川楔起きんか」

『うーん、お母さん後五分』

「またそのくだりをする気が！」

『なんだよ自称神様（笑）今就寝中なんだろ。夢にまで出てきて何がしたいの？』

「自称じゃないって自称何て言っった2000万と武偵弾を返

してもらっぞ」

『神様のくせにおどすの？酷いなあ』

「そういつつもりじゃないんじやよ。その反応ってことは届いたんじゃないな。それは勝手に使ってもいいけどもうやらんから大切に使うんじやぞ」

『それだけ？じゃあ楽しい夢に変えてよ。』

「嫌じゃ変えん。なぜならそっちの世界じゃともう朝の七時じゃからのもう主は起きるんじや。」

『え、ほんとに？神様に会っただけでそんなに時間がたっちゃうの？そんなの悪夢じゃないか』

「じゃあ起きるんじや！」そう言うってからハンマーで頭を殴られて目の前が真っ暗になった。

そうして僕は悪夢を見てから起きた。

第五弾 し悪夢し（後書き）

すみません。もうサブタイが思い浮かばないので適当につけちゃいました。

もう一度言います。すみませんm（――）m

毎度毎度ながら変な点があれば教えて下さいm（――）m

第六弾 〱朝の出来事〱（前書き）

サブタイが思い浮かばねえええええええ

第六弾　く朝の出来事く

第六弾　く朝の出来事く

僕が起きたときは、ちょうどアリアちゃんがキンジを起こすつもりで暴力を振るっていた

「バカキンジ！ほら起きなさい！」バカキンジってww

「はにふんだ。ほの」訳をすると多分なにすんだ。このだと思う

「朝御飯出しなさいよ！」たしかにお腹減ったなあ

「し……る……か！」え！？朝御飯ってないの！？

「お腹すくじゃない！」「すかせこのバカ」「バカですってキンジの分際で」とか言ってる間に僕は空腹を虚構なかつたことにした。

「ミソギ！アタも起きてるならなにか言いなさい！朝御飯がないのよー！」

『僕は別にお腹なんて減ってないよ』

「嘘言わないで！昨日何も食べなかったじゃないの」「いや空腹を虚構したし……」

「ほら球磨川も腹減ってないって言ってんだろ！」キンジがアリアちゃんに殴って来るのをよけながら言った。

「アリア！登校時間ずらすぞ。お前先に出ろ。」ああ、たしかにアリアちゃんは女子だから一緒に出ちゃまずいよね。

「やだ！逃がすものか！キンジ達はあたしのドレイだ！」アリアちゃんがキンジの腕にしがみついた。

『じゃあ僕先に出とくよ。キンジ後のことは任せた。』そう言ってバス停に向かった。

しばらくしてキンジがアリアちゃんを引きずってバス停に来た。

『キンジもよく付き合ってるなあ。感心するよ。』

「別に好きで付き合ってる訳じゃない。くそあの疫病神め！」

こうして朝を過ごした

第六弾 〽朝の出来事〽（後書き）

少な目ですが許してくださいm（――）m

おかしいところがあれば教えてくださいm（――）m

第七弾 し猫探し（前書き）

やはり球磨川さんらしさがありません。

第七弾 し猫探しし

第七弾 し猫探しし

学校で普通に授業を受けて五時間目の専門科目の時間になった。

『キンジってこの時間はなにをするの？』僕がたずねてみた。

「校外でする依頼をしながらアリア対策を練る。球磨川はなにするんだ？」

『僕は先生にどの学科にするか見学でもして決めるとか言われたから探偵科インクスタでも見学するよ』

「そうか、じゃあ一緒に専門棟にいくか」そう言ってキンジと専門棟クエストに依頼を受けに行った

『ねえ、武偵高がどんなことがあるのか教えてよ』歩いている途中に聞いた

「ああ、そうか転校してきたから知らないのか」

そうして武偵憲章のような基本的なことから始まり、行事なども教えてもらった。そして探偵科の専門棟についた

「ここが探偵科の専門棟だ。じゃあ俺は依頼受けにいつてくるから、適当に見学しといてくれ」

『うんわかった。』

しばらく適当に見学しといたらキンジが来た

『キンジは依頼ってどんなのを受けるの?』

「俺はEランクだからそれに似合う依頼を受けたよ」

『じゃあ僕もやるよ』

「ああ、助かる」そうして僕たちは専門棟からでた。その直後

「キンジ」最近の最も会いたくないランキング一位のアリアちゃんが出来た。

「なんで……お前がここにいるんだよ………」キンジが残念そうに言った。いや実際に残念なのだろう

「あんたたち二人がここにいるからよ」

「答えになってないだろ強襲科^{アサルト}の授業サボっていいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位揃えてるもんね」アッカベーをしていた。

「あんた普段どんな依頼してるのよ?」「Eランクにお似合いの簡単な依頼だよ」

『そついやなんでキンジはEランクなの?』

「1年3学期の期末を受けなかったからだよ。ていうかランクなんてどうでもいいんだけどな」

「ランクなんてどうでもいいから今日受けた依頼を教えなさい」

「お前に教える義務はない」「風穴開けられたいの?」「猫探しだよ」

「ふーんで、あんたは?」

『僕はただの見学だよ。なんにもするつもりなんてないよ。』

「球磨川、行くぞ」キンジがアリアちゃんから逃げるように歩いた。するとアリアちゃんもついてきた

「ついてくるな」「いいから、あんたの武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくるな」「そんなにあたしが嫌い?」「大っ嫌いだ。ついてくるな」

「もっペンいったら風穴」暴君だなあ

『猫探しってどうやるの?専用の道具とかあるの?』

「ない、しらみつぶしに歩くだけだ」え、探偵科って名前だけ!?

「ていうか、お腹減った」さっき食べたばかりなのに燃費悪いな

「なにかおごって」

『キンジ、ちょうどいいからその銀行でお金下ろしてくるよ』

「わかった。球磨川はなにかいるか？」

『うーん、別に要らないや』そう言ってから銀行へお金を下ろしにいった。

戻ってきたら「この変態」とか言われて殴られている頃だった。

その後猫探しを続行すると水辺に猫がいた。それをキンジが捕まえるために行った。

『キンジ、猫にいやがられてるよ』

「これは怯えてるだけだ問題ない。あと少し……届いた」キンジが猫を捕まえた。やはり嫌がられているようで逃げようとしていた。

その後、専門棟に戻ったら僕はなにもしないのに報酬と単位をもらった。

第七弾 〽猫探し〽 (後書き)

やっとここまで来た。あと少しでハイジャックまで行ける………

第八弾 〱口論〱（前書き）

今回からキンジのことはキンジちゃんと言います。

ちなみに武藤は武藤ちゃん、不知火は不知火ちゃん、白雪は白雪ちゃんです。

第八弾　く口論く

第八弾　く口論く

猫探しの次の日の夜

「さすが貴族様。身だしなみにもお気を遣ってらっしゃる」

そう言っとうとうキンジちゃんがアリアちゃんに牙を向けた。

『キンジちゃん、貴族ってアリアちゃんが貴族なの？』

「ああ、そのようだ。しかも一人も犯人を取り逃がしたことないらしい」

「あたしのこと調べたわね。でも、この前一人逃げられたわ」

「凄いヤツもいたもんだな。誰を逃がした？」

「あんたよ」そういつた瞬間キンジちゃんが飲み物を吹き出していた。

『キンジちゃんって犯罪者だったの？』

「いや、違う球磨川俺は犯罪者じゃない。なんでカウントされてんだよ！」

「あたしに強姦したじゃない」

「あれは不可抗力って言うてんだろ！」

「うるさい、うるさい。とにかくあんたたちならあたしの奴隷になれるかもしれないのよ。強襲科アサルトに戻りなさい！」

『ねえ、その奴隷ってちゃんとパーティーって言うことはできないの？』

「俺はEランクだぞ。はい残念でした。他を当たれ！」

「嘘よ！入学した時Sランクだったじゃないの」

『え、キンジちゃんってSランクだったの？』

「あれはまぐれだ。とにかく今は無理だ」

「今はってことは何かすればいいのね。手伝ってあげるから教えなさい」

「一回だけだぞ。一回だけ強襲科に戻ってやる。ただし組むのは一度だけだ。そして一件だけ事件をやってやる」キンジちゃんが白旗をあげた。

「で、あんたは？」僕の方を向いていつてきた。

『うーん、キンジちゃんが戻るなら僕も行くよ。体験ってことで』

「決まりねその一件であんたたちの实力を見るわ」

「全力でやるのよ」

「ああ、全力でやってやるよ」キンジちゃんが悪意に満ちた顔で言っている

『まあ、頑張るよ』

そう言ってからアリアちゃんは自分のうちに帰った。

『キンジちゃん、なんで戻る気になったの？』

「その一件でアリアを失望させるためだ。」

第八弾 〓口論〓（後書き）

少な目です。すみません

第九弾 〱強襲科〱（前書き）

もう球磨川さんに似ていないので、球磨川さんの皮を被って真似しようと思死な誰かです。

っていかそう思ってくれた方が都合上いいです。

第九弾　く強襲科く

第九弾　く強襲科く

次の日、授業が終わってキンジちゃんと共に強襲科^{アサルト}に行った。

『キンジちゃん、なんでここが『明日無き学科』って言われてるの？』

「この学科の卒業時生存率が97・1%だからだ。つまりこの学科の生徒の100人に3人死ぬってことだ」

「おーキンジ！お前は絶対帰ってくるって信じてたぜ。さあここで一秒でも早く死ね」

このような失礼なことを言いながらこっちに人が集まってきた。それを一つ一つ丁寧に返していた。

『キンジちゃん、なんで死ね死ね言われてるの？そんなに嫌われてたの？』

「ちがう。ここでは死ね死ね言うのが挨拶なんだよ」

「えーと、球磨川だったっけか。お前もここに死にに来たのか。さあ早く死ねんだ。」

『えーと、三上ちゃん？君こそ早く死になよ。どうせモブキャラだから死んだ方がいいぜ』

「ぐふっ、なかなか言うなあ。モブキャラだって、心が折れそんな言葉だぜ」

『本心を言っただけだよ。三上ちゃんってモブキャラっぽいだよ？』

「こ、これ以上言わないでくれ。これ以上は心が折れる」

『これくらいで心が折れるって、やっぱり君はモブキャラだよ』

パキッ、三上ちゃんの何かがおれる音がした。

「球磨川、さすがにモブキャラって言い過ぎだと思うぞ」

「どうせ俺なんてモブキャラだ。どうせ俺なんて、どうせ俺なんて三上ちゃんが泣気ながら言っている」

「ほら、三上の心が折れてるじゃねえか。本当のことだがモブキャラって言い過ぎだと思うぞ。せめて脇役とかにしろ。」

キンジちゃんが言っている間にみんなが

「やめてあげて、もう三上くんのライフは0よ」とか言っていた。

『キンジちゃんって案外Sだね。ビックリしたよ』

「お前に言われたくねえ。ってか俺はなにもいってないぞ。ってなんだみんなその冷たい視線は？俺はなにもやってない」

その後、三上ちゃんはよりいっそうキンジちゃんにきついことを言

われて、ダウンした。

全員を再起不能にするまでキンジちゃんを責めてしまった。みんなが三上ちゃんウィルスに感染したかのようにダウンしている。

『キンジちゃん、さすがに言い過ぎだと思っよ』

「俺はお前が言ってる言葉があまりに酷すぎるからフォローをしただけだ」

『そのフォローって、僕が村上ちゃんに年増が好きそうな顔してるね。って言ったら、違う村上は6〜12歳が大好きなロリコンだ！とか言っただやっ？』

「ああ、あれじゃあ村上の心も折れそうだったからな」

『キンジちゃんの発言に村上ちゃんは心が折れたんだぜ』

「そ…そんな…バカな…まさか俺がこんな地獄絵図を作っちゃったのか…蘭豹が来る前に逃げるぞ」

『その蘭豹ちゃんってやつのも折ろっぜ』

「バカ野郎あんなやつ的心なんて折れるわけないだろ」

そう言ってから僕とキンジちゃんは強襲科の外に出た

第九弾 〱強襲科〱（後書き）

前書きにも書きましたが、球磨川さんの皮を被った真似しようと必死な誰かです

第十弾　くバスジャックく

第十弾　くバスジャックく

門のところにアリアちゃんがいた

「あんた人気者なんだね。ビックリしたよ」アリアちゃんがいった

「こんな奴らに好かれたくない」また酷いことを言った

『よく言うよキンジちゃん。あんなに生き生きとして心へし折ってたじゃないか』

「生き生きしてないし、俺は心を折ってねえ」

『まだそんなこと言うの？キンジちゃんさっき認めてたじゃないか』

「もうこの話はいい。そんなことより球磨川、ゲーセン行かねえか？」

「ねえ、『ゲーセン』ってなに？」アリアちゃんが聞いてきた

『ゲームセンターの略だよ。キンジちゃん早くいこうよ』

「おまえ、そんなことも知らねえのか」無視された

「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。私も行く、ご褒美よ」

「ついてくんな」 『ついてこなくていいよ』 キンジちゃんとハモってしまった

「やだっ！」 アリアちゃんがそういうと共にキンジちゃんが走り出した。それに続いてアリアちゃんも走り出した。けど僕は面倒だしアリアちゃんといたくないから歩いた。

『いつてらっしゃーい。アリアちゃんと楽しんでねー』 そう言うってから寮に向かった

寮に着いてしばらく（2時間ぐらい）待つてるとキンジちゃんが嬉しそくに帰ってきた

『キンジちゃん、アリアちゃんとかあったの？ 顔がキモいぜ』 そう言うのと、何もねえよと言って寝室に行った。キンジちゃんがいなくて暇だったから僕も寝た

次の日

目が覚めると当然だが朝だった。昨日食べたコンビニ弁当の残りを食らった。キンジちゃんが7時50分になってもまだ行かないから、僕も行かなかった

『まだいかないの？』 あれから5分たったが、いく素振りを見せないキンジちゃんに言った

「そろそろ行くか」 キンジちゃんは腕時計を見てから言った。絶対バスに乗れないと思うんだけど…

予想通りバスに乗り遅れてしまった。キンジちゃんは諦めず武藤ちゃんに交渉したが無理だった

『ねえ、キンジちゃんあの時間に出といてバスに乗れると思ったの？』歩きながら聞いた

「腕時計の時間があつてなかったんだよ」いいわけが見苦しい

しばらく沈黙状態が続いたがキンジちゃんの携帯で沈黙は破れた。電話相手はアリアちゃんらしいキンジちゃんが電話を終えて

「球磨川、事件だ。C装備して女子寮の屋上に行くぞ」とか言ってきた

『じゃあ先に女子寮行つとくからC装備してから来てよ』

「おまえもC装備すんだよ」

『嫌だよ。C装備なんてださいの。この学ランのままだいいから先に行つとくよ』そう言ってから歩いて女子寮に行った

「おい待てつて」キンジちゃんが言ってきたけど無視した

キンジちゃんより先に着いたらいきなりアリアちゃんに怒られた

「なんであんたC装備してないのよ！死にたいの！」

『大丈夫だつて、死なないから』あきれたとか言つて諦めてくれたせつかくだから階段の下にいる無言少女としゃべってみようと思う

『ねえ、君は何科なの？』

「……………」返事がない。ただの屍のようだ。しゃべるのは諦めた沈黙のまましばらくするとキンジちゃんが到着した。その後なんやかんやでヘリに乗った

パラシュートで降りていった。僕は失敗したから失敗を虚構なかつたことした誰も怪しく思っ
てなかった

『ねえ、アリアちゃん、僕はどうすればいいの？』聞いたけど武偵なら自分で考えなさいとか言ってきた

……………とりあえず中に入った。そしたらキンジちゃんがいきなり「伏せろっ」って言うといっぱい銃弾が飛んできた。全弾命中。血がっぱいで、あっさり死んだ。そして生き返る。みんな伏せていたから気づいていないようだ……キンジちゃんだけは見ていた。驚いているようだ

すると大きく揺れた。キンジちゃんが運転席を見に行ったあと

「武藤、運転変われ」とか言った。武藤ちゃんは色々いつてたけど結局運転が変わった。

『僕は変な乗り物を撃つとくよ』そう言ってホルスターから二丁パイパーをとって撃ち始めた

しばらく撃っていると

「アリア、アリアああ！」とかキンジが叫んだ後、無言少女がへりから何発か撃ってから爆弾がとれて事件が終わった

（あれ？もしかして、この事件自体を虚構してたら何もしなくてもよかったんじゃないか……）

まあ終わったことだからスルーしといた

第十弾 くバスジャックく（後書き）

クリスマスイブですね。去年まではボツチ（親は仕事行ってた）でしたが今年は塾があるからボツチじゃない！

球磨川らしさとかについてはもうスルーでよろしく

第十一弾 く面会く

第十一弾 く面会く

僕は今病院に来ている。理由はアリアちゃんが身を呈してキンジちゃんを守ったせいで怪我しちゃったらしいからだ。

『お金持ちってというのは本当だったのかー。個室ってすごいなあ』
呟いてなかに入る

「楔！あんたは何しにきたのよ！バスジャックのことならもういいわ。帰って」入ると行きなり帰れって言われてしまった。

『うんわかったよ帰るね』どこを怪我したかわかったから帰った。
もちろん『大嘘憑き』で怪我をなかったことにしてから

寮に戻るとキンジちゃんがカリカリしていた

『キンジちゃん、なにカリカリしてんだよ。プラスならプラスらしく人生を楽しみなよ』

「球磨川か。今は冗談に付き合えないからどっか行っててくれ」キンジちゃんにまで追い出されちゃったよ

暇だから強襲科アサルトに行った

『やあ村上ちゃん前は災難だったね』村上ちゃんがいたから喋りかけた

「ひ、ひいいいい」村上ちゃんが逃げていった。

『……………あれ？僕何かしたかな？ねえ僕って何かしたの？』近くにいた男子にいうと

「ゆ、ゆるしてくださいいいいい」知らない人にまで嫌われてしまった

『……………帰ろう』がっかりして帰った

『キンジちゃん、お腹減っちゃったよ。なにか買ってきてよ』僕がそう言つと

「自分で買いに行け」とキンジちゃんに言われた

『じゃあいいや』そう言ってからソファーに寝転がった。しばらく時間がたつといつの間にか寝てしまった

目が覚めるとキンジちゃんが掃除をしていた。だけど僕には関係ない休日だから二度寝した

起きるとキンジちゃんがいなくなっていた。あ、そういえば携帯買おうと思ってたんだった。

そうして、僕は携帯を買いにdocomoに行つて携帯を買った後、奇妙なのを見てしまった。なんとキンジちゃんがアリアちゃんをストーキングしていた。

『やあ、キンジちゃん。新宿まで来てなにやってるんだい？』

「別にアリアを尾行してるだけだ」うわっストーカーってことを認めちゃったよ

『じゃあ僕もやるよ』面白そうだから混ざった

そして混ざった直後に

「へったな尾行。尻尾が見えてるわよ」とアリアちゃんが振り返って言うてきた

『キンジちゃん。ばれてるじゃないか』

「うるさい。お前が武偵なら調べるとか行っただろ。だからいわれた通りにしただけだ」

「あんたたちも来なさい。一応『武偵殺し』の被害者なんだから」そう言っただけのところは警察署だった

『キンジちゃん、僕たちは騙されたようだ。やっぱり警察に引き渡されてしまうんだよ』

「違うわよ。会って欲しい人がいるだけよ」アリアちゃんが言うてきた

そうして、面会場所について、ガラスの向こうにはアリアちゃんのお母さんがいた。

「アリア、この人たちは彼氏さん？ダメよアリア二人も彼氏を作っちゃ二人に失礼よ」アリアちゃんのお母さんが言った

「違うわママ。この二人は『武偵殺し』の被害者よ」とか言った。その後も会話が続き、イ・ウーやらパートナーやら話していた

面会が終わって警察署を出るとアリアちゃんが泣いてしまった。

『キンジちゃん何か気の利いたこと言ってあげなよ』キンジちゃんに小声で言った。

だけど無視された。泣き止んだアリアちゃんに帰ってって言われたから、キンジちゃんと一緒に無言で帰っていった

第十一弾 く面会く（後書き）

もつぐだぐだです。理由は早く進めたいからです

第十二弾 くハイジャックく

第十二弾 くハイジャックく

早速だけど今僕は羽田空港にいる。理由？おいおいそんなの自分で考えるよ。え？考えたけどわからない？しょうがないなあ。あれはほんの一時間前だ……

『あれ？』誰にもメアド教えてないのにメールがきた。

『ほんと誰だよ。誰にも教えてないのにメール来るなんて』言いながら開くと

「りこりんだよ。みそぎん、今から羽田空港のANA600便つていうのに来て。あと、この事誰にも教えないでね」と書いてあった

『なんで理子ちゃん僕のメアド知ってるんだろう？もしかしてファンかな？』変な独り言を呟きながら羽田空港に向かった。そして現在にいたる

『あれ？あそこ走ってるのキンジちゃんじゃないかな？』独り言をまた呟いてしまった

『おい、キンジちゃん』キンジちゃんに呼び掛けた

「ん？球磨川なんでここにいるんだよ！？」何を驚いてるんだらう？

『えーと…………何となく？じゃあねキンジちゃん。僕はANAGOO便つてのにいくから』そう言つと

「そうか、じゃあお前はここで逮捕だ。観念しろ『武偵殺し』」へ？キンジちゃんは何をいつてるのかな？僕が『武偵殺し』？

『おいおい、何を根拠にしていってるんだよ』

「おかしいと思つたんだよ。まずは、お前に初めて会つたときだ。お前はセグウェイから逃げてきた。しかも殺されずに、俺には頭を狙つていた。お前も狙われていないとおかしい。逃げてくる間も。逃げるのに集中してるのに全て避けれる訳がない。体育倉庫に来たときのお前は傷1つなかった。

そして、バスジャック、お前は学ランのままで行つた。それははじめから狙われないとわかつていたから、つまりお前がコントロールしていたからだ。結局、バスで無数に銃弾が飛んできた時にお前はたつていたのに無傷だつた」キンジちゃんが言い終えた

『熱弁したのはいいけど、キンジちゃんは僕的能力を知らないだらう？』

「能力？一般高からの転校生がそんなものを持つているわけないだらうが」キンジちゃんは完全に僕が『武偵殺し』だと思つていようだ。

『僕は『大嘘憑き』という能力を持つてるんだよ。『大嘘憑き』というの…………まあ、あるものを『なかつたことに虚構』する能力だよ。だからすべての傷を虚構した。それだけだぜ。だから僕は被害者だ』

「じゃあ今見せてみる」キンジちゃんが言ったから、僕は迷わずキンジちゃんの頭に螺子を螺子こんだ。途中で「なっ!？」とキンジちゃんが言ったが容赦しない。螺子こむと大量の血が出てキンジちゃんは死んで倒れた。回りの客は「キャーーーー」とか「人殺しーーーー」とか言っていた

僕はキンジちゃんの死を『虚構』した。すると、キンジちゃんが起きあがった

「な、今俺は球磨川に殺されたはずじゃあ……何がどうなってるんだよ」そう言ってキンジちゃんがこちらを見ると

「球磨川でめえ、よくもやりやがったな」キンジちゃんが怒ってくる

『おいおい、やれって言ったからやったんだぜ。そんなに怒るなよ。ちゃんと死んだこと』虚構』してやっただろ？まあこれでわかってくれただろ』

「ああ、わかった。お前が『武偵殺し』ではないことは。だがお前は俺を殺したそれは事実だ」

『だから『虚構』したっていったじゃないか。そんなことよりAN A600便つてのに乗ろうぜ』そう言って向かった

「絶対にお前が何者が暴いてやる」とかいつてついでくる

今はなんやかんやでAN A600便というののエリアの部屋にいる

『アリアちゃん、言っとくが僕はキンジちゃんと同じ理由でいる訳じゃないぜ』一応理子ちゃんが来てってメールしたから来たんだ

「じゃあなんで来たんだよ」キンジちゃんがこれ以上はない警戒している

『まだ僕が『武偵殺し』だと思ってるの？キンジちゃんはしつこいなあ』

「当たり前だろ。あんなことされたんだからな」

「あんなことって何よ」アリアちゃんが言った後すぐに銃声が聞こえた

「やっぱりやがったか」そう言ってキンジちゃんはいこうとする

『キンジちゃん、何か僕にいうことはない？』

「お前は俺を殺したじゃねえか。お互い様だろ。いや、俺の方が損をしている」

『損をしているのは僕の方だよ。まあそんなことより何か変なのほつてきたぜ』

「なっ！？毒ガスかヤバイ」とかいつてアリアちゃんと部屋に入っていく。僕を置いて

『最悪なやつだな『虚構』できるからって痛みとかはあるんだぞ』あれ？苦しくないこれもしかしてただの煙幕とかかな？

『キンジちゃん、これなんともないぜ早く出てこいよ』キンジちゃんとアリアちゃんが出てきた。

「楔、一階のバーに行くわよそこに『武偵殺し』がいるわ」アリアちゃんが言った

バーについた

「そこまでよっ」アリアちゃんが言う

『君のせいでキンジちゃんに疑われたじゃないか』僕はパイファアを構えながら言う

「まんまと引っ掛かってくれやがりましたね」アテナントさんが理子ちゃんに変身した

「みそぎんもよく引っ掛かってくれたね。ほんと、ギリギリまで携帯持っていないからドキドキしたよ」

『なーんだ。そういうことかーやっぱ僕は被害者だった』パイファアを撃つ

「やるのが早いよ。楔、お前のことを調べたけど全く乗ってなかった。イ・ウーの情報網をもつてしても出てこなかった。お前はいつたい何者だ？」理子ちゃんが男声になっていつてきた

『ただの高校生だよ』パイファア二丁で撃つ。理子ちゃんにしゃべ

らせる暇を与えずに撃ち続ける

「待て、楔、空気をよめ。私はオルメスと戦うんだよ」アリアちゃんがオルメスという言葉で

「あんた何者？」とか言った。もちろんその間も撃ち続ける

「教えてほしければそいつを止める。さっきから避けるのがきつい。そいつに空気をよませろ」

「楔、やめなさい！手を出さないで」アリアちゃんが言うてくる。しょうがないからやめてやった

「助かった」理子ちゃんが呟いた

その後何やら話してアリアちゃんと理子ちゃんの戦闘になった。キンジちゃんが怒っていた。またしばらくすると、理子ちゃんの髪が動いたと思えばアリアちゃんが重症をおった。キンジちゃんは僕的能力を忘れているようでアリアちゃんを抱えてどっかに行った

『えーと、理子ちゃん、もう僕は手を出していいのかい？』

「くふ、いいよお。遊んであげる」そうして先頭が始まった

僕はパイプアーで撃ちながら接近する。理子ちゃんは避けるので精一杯のようだ。と思ったけど違った。ある程度近づいたら、肩から切られた。

『痛いな』そう言って傷を虚構して、傷がなくなったのに驚いた顔をしている理子ちゃんの顔面に螺子を螺子こんだ。理子ちゃんの血

が吹き出る

『勝負あったね。一応生き返してあげるよ』そう言っただけを虚構した

「てめえ。よくもやりあがったな」また髪で斬りにきた今度は首を

『無駄だっただけ』斬られた傷を虚構してまた理子ちゃんの顔面に螺子を螺子こんだ。そして虚構した。そののループを何回かすると

「助けて！」と言っただけに行っただ。その後、また螺子こもうと思っただけかけると、飛行機が大きく傾いて理子ちゃんは周りに爆弾が張り巡らされている壁にもたれかかって

「楔、お前、イ・ウーにこい」とか言っただけ

『なんかよくわからないけど嫌だよ。僕を何回も殺したやつ仲間になるなんて』という

「キンジにも伝えとけ。いつでも三人を歓迎するとな」そして壁が爆発してからしたに落ちていった

「球磨川っ、遅いと思っただけみれば、理子はどうした」戻っただけキンジが言っただけ

『なんか逃げちゃったよ』そう言っただけ飛行機がなにかに当たったよ
うな衝撃が襲った

「楔っ！理子はどこに行っただの」アリアちゃんが言っただけ

『逃げただけ、この衝撃なんだっただけ？』様子を見に行っただけ

ンジちゃんに聞いた

「アリア！操縦席に向かうよ」とかキンジちゃんが言って二人ともどっかに行く

『待つてよー』僕もついていく

操縦室につくと機長と副機長と思われる人が倒れていた。気絶してるみたいだ。

『キンジちゃん。なんで急いできたの？』聞くと

「ミサイルがこの飛行機の翼に当たって壊れたんだ」聞くと同時に破壊されたのを虚構した。ついでに機長たちの気絶も虚構した

「う…確か…」とかいつて起きた

「！？」キンジちゃんが驚いている

「なんでこいつらが起きるのよ」アリアちゃんも驚いている

『キンジちゃん、僕的能力忘れちゃった訳じゃないよね。僕が虚構してあげたんだよ』

そうして、なんの異常もない飛行機を機長と副機長によって運転され、羽田空港に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2526z/>

緋弾のアリア～負完全な転生者～

2011年12月29日01時56分発行